森田　知貴

私たちが普段生活している場所には、獰猛な野生動物や、鋭い棘を持つ植物、土石流などの自然災害など、注意しておきたいものはたくさんあります。しかし、危険とされる生きものの多くは、自分の身を守り、エサを捕まえるために、毒や棘をもっているだけで、私たちを困らせようとしているのではありません。私たちが不用意な接近や接触をしない限り、実際に危害を加えられることはありません。また、時折起こる自然災害も、その原因となるメカニズムを知ることで事故にあう危険や被害を小さくすることができます。

本企画展では、動物、植物、地質の各分野から野外の危険なものについて紹介し、誤解に基づく情報や、上手な接し方を学べるような展示を行っています。更に、学芸員が味わった危険な体験等、興味深く面白い話も紹介しており、より実践的な対応策などを知ることができます。

展示風景

第１章 こんな場所にこんな危険！

第１章では「こんな場所にこんな危険」というテーマで、それぞれの場所にある危険なものについて、特徴や対処方法を紹介しています。

（1）家、庭、公園

私たちの日常生活（家、庭、公園）に潜む危険な生きものについて、紹介しています。

ハチの巣に近づいてしまったときは、いくつかの警戒段階があります。あごを動かしてカチカチと音を発したときは最終通告となります。騒がず、速やかに巣から離れるようにすることが大切です。

オオスズメバチ

（2）草むら、河原

草むらや河原で生活している危険な生きものや、キャンプや川遊びに行ったときなどに出会う危険について紹介しています。

ヘビは危険と思う人が多いと思いますが、本州で毒を持っているヘビは、マムシとヤマカガシしかいません。それ以外の種類は、牙はありますが、毒を持っていません。ヤマカガシの毒は 2 種類あり、首の背面の皮ふの下にある毒は、食べたヒキガエルの毒を自分の毒に再利用したものです。

ニホンマムシ

（3）雑木林、山

雑木林や山で生活している危険な生きものや、ハイキングや登山に行ったときなどに出会う危険について紹介しています。

山を歩く時に注意をしなくてはいけないのが、ヤマウルシです。背丈がちょうど足を滑らせたときに手でつかむ高さなので、つい触ってしまい、かぶれてしまいます。柄が赤い複葉の植物には、触らないほうが賢明です。

ヤマウルシ

第２章 見間違え注意！

第２章では、見間違えがよく発生する危険なものについて紹介しています。

やわらかい山菜が採れる春は、まだ植物が芽吹いたばかりで見分けが難しい季節です。同じような場所に山菜によく似た有毒植物が生えていることもあり、注意が必要です。

秋は、きのこ狩りの季節です。きのこ狩りを行うにあたっては、詳しい人に教わるなどして勉強を重ね、自分で見分けられるようになること、本当に自信のある確実なものしか食べないこと、また、むやみに人にあげたりせず、自己責任で楽しむことなどが大切です。

左：クサウラベニタケ
右：ウラベニホテイシメジ

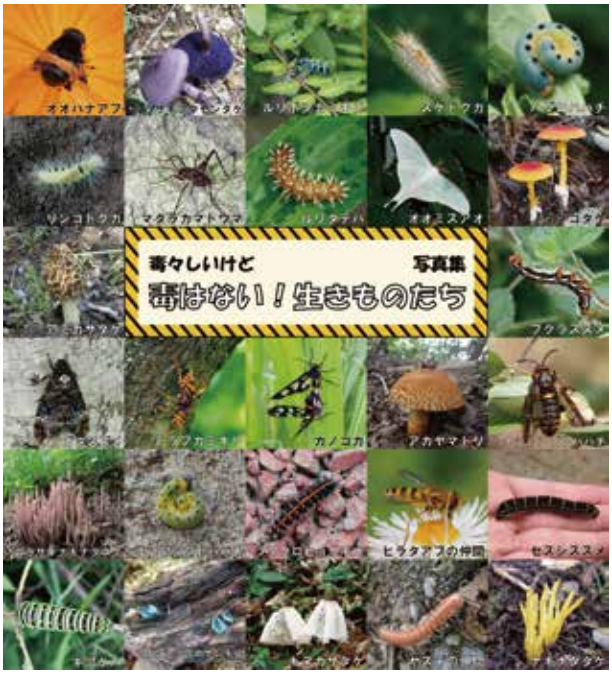
第３章 それは冤罪！

第３章では、見た目やイメージなどから危険なものと勘違いされている生きものや、接し方を間違えなければ、安全な生きものについて紹介しています。

ツキノワグマのフンを観察すると、木の実等が見られます。冬の間は、シカなどの死体を見つけて食べることはありますが、他の季節は、昆虫・植物の葉・サクラ類・コナラ・ブナ・ヤマブドウ・アケビ等、植物食が中心であることが分かっています。同様に、コウモリ類のフンを観察すると、昆虫のハネなどが見られます。吸血鬼につながるイメージのためか「血を吸う生きもの」と思われがちですが、国内に生息するコウモリは果実や昆虫を食べています。日本以外でも吸血性のコウモリは、中南米に生息するチスイコウモリ類だけです。

ゲジやヤスデは、その外見からムカデ類と同じ強力な毒をもつ危険な生きもののイメージが強いのですが、毒性はほとんどなく、人に被害を及ぼすことはありません。落ち葉や朽ち木、菌類を食べる分解者の役割をもちます。

ハチも国内に生息する種類は約 4,500 種ですが、毒針を持つハチは 1,200 種程度と半分以下です。その中でも攻撃的なのは、スズメバチ、アシナガバチ、ミツバチの仲間だけです。



毒々しいけど毒はない！生きものたち

第４章 学芸員の体験談！

第４章では、学芸員が味わった危険な体験談について紹介しています。

危険に遭遇した動物・植物・地質の学芸員が、経験者ならではの体験談をご紹介。より実践的な対応などを知ることができます。また、調査等は、常に危険と隣り合わせであるということも知ることができます。今だから言える、興味深い話です。

危険なものに対しての注意するポイント、見分け方などを理解できるとともに、見た目や先入観、イメージばかりで悪者扱いしたり、過剰に怖がる必要はないということが分かる、興味深く楽しめる展示となっています。ぜひご来館ください。

（もりた　ともよし・担当課長）